

木魚は主に、お経を読むときにリズムを整える事に使います。

現在国産の木魚は、愛知県で数人の職人さんによって作られており、大変貴重なものとなっています。

鈴<sup>すず</sup>を横に倒したような形の木魚は、楠<sup>くす</sup>の木で作られる物が一般的です。そして、両脇から玉をくわえ合う二匹の龍の顔の彫刻が施されています。顔の下には魚の鱗<sup>うろこ</sup>が彫られており、頭が龍で体が魚の様子がみられます。数ある木魚の中には、お城<sup>てんしゆかく</sup>の天守閣にある鯨（しゃちほこ）のような姿の物や、蛇のような物もありますが、一般的には龍の頭に魚の鱗の胴体を持つものが木魚の姿です。

もともと木魚の原型は、魚の板のようなものでした。鯨<sup>しゃち</sup>のような姿の魚で、口に玉をくわえています。魚の胴体の真ん中に鱗<sup>うろこ</sup>のない丸く叩く場所があり、そこを弓なりに反った木の棒で直接叩き、音を出します。何に使うのかというと、修行道場などでの食事の合図に使われます。大本山永平寺では、魚鼓（ほう）という、三メートル弱の魚の形をした板が、修行僧が食事をする僧堂<sup>そうどう</sup>の外廊下に吊り下げられており、当番の修行僧がこれを叩いて合図に使用しています。

魚の形をしている理由は、古来魚は眠らないといわれており、寝る間も惜しんで修行しなさい、という厳しい教えであり、僧堂で坐禅を組みながら食事をする曹洞宗をはじめとする禅宗ならではのものです。

この魚の形をした板のようなものが、現在の木魚になったといわれています。

ポクポクと木魚を叩いて音を鳴らしながらお坊さんがお経を唱える姿は、子供たちにとって不思議なものに映るようで、つつい叩きたくなるようです。しかし木魚は、お経を唱える時につかう大切な仏具<sup>ぶつぐ</sup>なので、勝手に叩くことはできません。

もし、木魚を叩いてみたいというお子さまがいれば、お坊さんにお問い合わせしてみたいでしょうか。

お経を唱えるときに叩く木魚を叩いてみる……お寺ならではの貴重な体験になることでしょう。